OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	社会的排除が他者とペットの温かさの評定に及ぼす影響 : 否定的評価懸念の水準による相違に注目して
Author(s)	田中, 宏明; 池上, 知子
Citation	対人社会心理学研究. 2018, 18, p. 145-154
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70552
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

社会的排除が他者とペットの温かさの評定に及ぼす影響
—否定的評価懸念の水準による相違に注目して—[1]

田中　宏明（大阪市立大学大学院文学研究科）
池上　知子（大阪市立大学大学院文学研究科）

人は社会的に排除されると、所属欲求を再充足するために、新たな社会的つながりを構築しようとすると考えられている。ところが、近年、否定的評価への懸念（FNE）が高い者は、再び排除されることを恐れ、そのような反応を示さないことが明らかにされてきた。そこで本研究では、他者から否定的に評価される可能性の低い状況では、高 FNE 者においても、被排除後に所属欲求を再充足しようとする動機が活性化する可能性について検討した。大学生（N = 70）を対象に実験を行い、排除操作の後に、人物とペットの写真を呈示し、それらの温かさを評定するよう求めた。その結果、排除操作により、参加者の FNE の高低と対象の種類に関わりなく、温かさが高く評定されるようになることが示された。この結果は、対象との相互作用が予期されず否定的評価に対する恐れが影響しにくい状況では、高 FNE 者においても所属欲求の充足が優先され、他者とペットに対して向社会的な性質を帰属する機能的投影が生起したことを示唆する。

キーワード：社会的排除、対人不安、機能的投影、擬人化

問題

Baumeister & Leary(1995)は、人は基本的欲求の一つとして所属欲求をもつと述べている。所属欲求とは、他者との関係を形成し、維持しようとする欲求である。彼らは、基本的欲求は認知過程に影響を与え、また、その充足が阻害されると人はそれを再充足するように動機づけられると考えられていることから、所属欲求もそのような性質をもつとしている。同様に、Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller(2007)は、社会的に排除された人は他者との関係を再構築するように動機づけられるという、社会的再結合仮説を提案し、社会的排除が被排除者の認知過程と対人行動に与える影響について検討している。さらに、Maner et al.(2007)は、このような対人関係を再構築しようとする反応が、被排除者の他者からの否定的評価に対する懸念(fear of negative evaluation; FNE)が高い場合には抑制されることも明らかにしている。

FNE は、他者の評価についての心配、他者の否定的評価についての苦悩、他者が自己を否定的に評価するという予期と定義され(Watson & Friend, 1969)、対人不安の認知的側面の中核的特徴だと考えられている(Rapee & Heimberg, 1997)。対人不安は、“現実の、あるいは想像上の対人状況において、個人的に評価されたり、評価されることが予想されることから生じる不安”と定義されている(Schlenker & Leary, 1982, p. 642)。対人不安を経験する頻度には個人差があり、これは対人不安特性と呼ばれる(Leary & Kowalski, 1995)。なお、対人不安と社交不安障害の間に質的な差はないと考えられている(Leary & Kowalski, 1995)。Rapee & Heimberg(1997)によると、否定的評価の予期がなされた結果、不安が経験される。不安は認知的、生理的、行動的要素から成り、社交不安障害に顕著な認知的症状として否定的思考、身体的症状として赤面や震え、行動的症状として対人状況の回避がある(Rapee & Heimberg, 1997)。よって、FNE はこれらの症状を予測する要因と位置づけることができる。

社会的排除を受けた後、FNE または対人不安特性が高い者は、元々抱いていた対人関係についての否定的な予測を確証し、新たな社会的接触を関係再構築の機会ではなく、さらなる脅威と認識する(Mallott, Maner, DeWall, & Schmidt, 2009; Maner et al., 2007)。そのため、対人関係を再構築しようとする動機（再結合動機）よりも、自己を対人的脅威から防衛しようとする動機（自己防衛動機）が優先される(Mallott et al., 2009; Maner et al., 2007)。

Maner et al.(2007)の Study 3 では、実験参加者が課題のパートナーとして他の参加者（実際は実験協力者）から選ばれる条件（統制条件）と選ばれない条件（排除条件）が設定され、受容水準が操作された。その後、参加者は課題とは関係ない人物の写真を呈示され、その印象を評定した。その結果、統制条件に比べて排除条件の方が、写真の人物の社交性を高く評価した。Maner et al.(2007)の Study 4 では、実験参加者がパートナーとビデオメッセージを交換した後、パートナーが参加者と会うことを拒否したと教示される条件（排除条件）と、パートナーが用事を忘れていたことに気付いて退席したと教示される条件（統制条件）が設定された。その後、新たな実験パ

ートナーの写真が呈示され、参加者はそのパートナーについて印象評定を行った。その結果、FNE が低い参加者においてのみ、統制条件よりも排除条件の方が、対象人物の社交性の評価が高いことが示された。なお、これらの二つの研究において、排除操作は気分に影響を与えず、気分と社交性の評定の間に有意な相関があることは報告されていない。

Maner et al.(2007)は、このような認知的傾向は機能的投影に類似した現象であり、対人関係の再構築を促進させると論じている。機能的投影とは、活性化した目標の達成に、機能的に関連する感情を他者がもつと認識することを意味し、目標を達成しようとする行動を促進すると考えられている(Maner et al., 2005)。他者が社交的であれば、その他者と対人関係を形成しやすいが、Maner et al.(2007)では、低 FNE 者においては、社会的に排除された後、所属欲求を再充足しようとする目標が活性化したために、他者の社交性が高いと認識されたと解釈されている。一方で、彼らの研究結果は、高 FNE 者においては、このような所属欲求の再充足に資する機能的投影が起こりにくいことを示唆している。

また、行動レベルにおいても、排除されると、低 FNE 者は向社会的行動をとるのに対して、高 FNE 者はそのような反応を示さないことが報告されている。例えば、Maner et al.(2007)の Study 5, 6 では、ビデオメッセージの交換による排除操作の後、報酬分配課題を実施したところ、低 FNE 者は実験パートナーに多くの報酬を分配するのに対して、高 FNE 者はそのような反応を示さないことを明らかにしている。Mallott et al.(2009)では、ビデオメッセージの交換による排除操作の後、新たな実験パートナーに送られる実験参加者のビデオメッセージの撮影が行われた。その結果、対人不安特性が低い参加者のビデオメッセージのアイコンタクトの質は、排除操作により向上したが、対人不安特性が高い参加者のアイコンタクトの質は低下した。対人不安特性の高い参加者は、対人不安特性の低い参加者に比べ、新たなパートナーとの関係構築に消極的であることがうかがえる。

一方、Leary(2001)は、対人不安のソシオメーター理論を提案している。この理論では、人は所属欲求と共に、他者から受容されている程度をモニターする動機 - 感情システムであるソシオメーターを持ち、他者が自分との関係性を低く評価していることをソシオメーターが検知した場合に、その警告サインとして対人不安が生じると考えられている。そして、対人不安は自己呈示の改善を促し、対人関係を維持するように機能していると想定されている。対人不安が生じる原因は、他者からの否定的評価を予期することにあると考えられてきたが(Rapee & Heimberg, 1997)、Leary(2001)は、他者が自分との関係性を高く評価していないと認識することに加え、他者からの受容を求めていることが原因となっていると述べている。

Tsumura & Murata(2015)は、新たな他者が内集団成員であり、自己を受容する可能性が高いと認識される場合には、高 FNE 者も、被排除後に対人関係を構築しようとすることを示している。彼らは、オンライン上のボールトスゲームであるサイバーボール(Williams, Cheung, & Choi, 2000)によって排除操作を行っている。統制条件の参加者にはパスが回されるが、排除条件の参加者にはパスが回されなかった。その後、次の課題には一人で行う課題と、実験パートナーと行う課題の二種類があり、どちらか一つを参加者が選択できると教示され、それぞれの課題を行いたいと思う程度を回答するように参加者は求められた。パートナーの集団成員性は、最小条件集団パラダイムにより操作されていた。その結果、低 FNE 者においては、パートナーの集団成員性に関わらず、排除されることで課題をパートナーと行うことを選択する傾向がみられたのに対し、高 FNE 者は、パートナーが外集団成員であると教示された場合より内集団成員であると教示された場合において、被排除後に課題をパートナーと行うことを選択する傾向を示した。このような傾向がみられたのは、内集団成員は、外集団成員に比べ、自己を受容する可能性が高いと認識されやすいからと考察されており(Tsumura & Murata, 2015)、前者は自己を否定的に評価する懸念を喚起しにくいためと考えられる。

所属欲求を充足するための代替方略

Molden & Maner(2013)は、被排除後に所属の感覚を回復させるための方法を、他者に取り入る行動をとるという方略、社会的情報(特に受容のサイン)に敏感になるという方略、既存の対人関係を強調または社会的関係を創造する方略の三種類に分類している。このうち、最初の方略は再度排除されるリスクを伴うため抑制されることがある。特に、高 FNE 者の場合はその可能性が高いことが予想される。ただ、彼らは、被排除後にさらなる排除に対する恐れによって、関係の回復を行う試みが抑制されたとしても、二つ目と三つ目の方略は抑制されることなく選択肢として残されると述べている。

社会的受容のサインに対する注目　二つ目の方略にあたる社会的情報に対する注意は、記憶や判断、選択、行動に比べて、対人認知過程と行動の初期段階に位置づけられる(DeWall, Maner, &

Rouby, 2009; Moskowitz, 2002)。個人内で目標が活性化すると、それが潜在的に活性化されたものであっても、その目標に関連する刺激に自動的に注意が向けられ、このような初期段階の反応は後期段階の反応の基盤となっていると考えられている(DeWall et al., 2009; Moskowitz, 2002)。DeWall et al.(2009)は、社会的排除の操作を受け、対人関係の再構築を動機づけられた参加者は、この目標に関連する社会的受容のサインである、喜び表情を示した顔画像に選択的に注意を向けることを示している。

Tanaka & Ikegami(2015)は、被排除後の注意の配分において、FNE の高低により差異がみられるかどうかを検討している。彼らは、サイバーボールの後、ドットプローブ課題により、受容のサインである喜び表情と脅威のサインである怒り表情に対する注意バイアスを測定した。その結果、低 FNE 者においては排除操作により喜び表情に配分される注意が増加したが、高 FNE 者においてはそのような反応はみられず、排除条件の高 FNE 者は喜び表情よりも怒り表情により多くの注意を配分していた。高 FNE 者は、排除された場合に脅威刺激に敏感であったといえる。なお、彼らの実験では、参加者は表情写真の人物と直接接触することを期待されておらず、写真の人物から否定的評価を受ける恐れのない状況にあった。それにもかかわらず、高 FNE 者は、自己防衛的動機を優先させていた点は留意する必要があろう。

社会的関係の創造　先述した第三の方略の一つに、擬人化(anthropomorphism)がある。これは、現実または架空の非人間的存在が人間的な特徴をもつと認識することである(Epley, Waytz, & Cacioppo, 2007)。社会的つながりを希求すると、非人間的存在と人間的表象の接近可能性が高まり、非人間的存在について人間的表象を用いた推論が行われる(Epley et al., 2007)。Epley, Akalis, Waytz, & Cacioppo(2008)では、参加者は排除操作のため映画を視聴し、主人公に感情移入するように求められた。社会的孤立条件の参加者は、主人公が無人島にいる映画を視聴した。統制条件の参加者は、野球選手が優勝した後、群衆と触れ合うシーンを、ネガティブな気分を生起させる恐怖条件の参加者は、主人公が連続殺人鬼を追う映画を視聴した。その後、参加者は自分が所有する、またはよく知っているペットについての評定を行った。その結果、社会的孤立条件の参加者は、他の二条件の参加者に比べて、ペットが社会的つながりに関する擬人的特徴(e.g., 思いやりがある)をもつと認識する傾向をより示したが、社会的つながりとは関連のない擬人的特徴と非擬人的特徴の評定は変化しなかった。これは、非人間的存在であるペットを擬人化し、社会的つながりに結びつく特徴を帰属することによって、すなわち機能的投影に類似したメカニズムを介して、所属欲求を間接的に充足させていることを意味している。

先行研究では、人はペットが自己を評価せずに無条件に受容する存在だと認識している可能性が示唆されている。現代的なアニマル・セラピーの先駆者である Levinson(1962)は、彼自身の治療事例をもとに、イヌは子どもを無条件に受容する性質があると述べている。Zasloff & Kidd(1994)の女子大学生を対象にした調査では、ペットと他者のどちらとも暮らしていない者は、ペットと暮らしている者、他者と暮らしている者、ペットと他者の両方と暮らしている者に比べて、孤独感が統計的に有意に高く、イヌを飼っている者とネコを飼っている者の間では、孤独感に差がみられないことが示されている。この結果は、ネコもイヌと同様に飼い主を受容する存在であることを示唆している。

Allen, Blascovich, Tomaka, & Kelsey(1991)は、イヌを飼っている成人女性を対象に、ストレッサー(口頭で回答する計算課題)に対する自律神経系反応が、親友とペットが同伴することによって異なるかどうかを検討した。実験の結果、生理反応(皮膚コンダクタンス、収縮期血圧)は、計算課題中に実験者のみが同席する条件(統制条件)よりも、実験者と参加者の親友が同席する条件の方が有意に高く、統制条件よりも実験者と参加者の飼いイヌが参加する条件の方が有意に低いことが示された。この結果は、親友は参加者を評価する可能性があるために評価懸念を喚起するのに対して、ペットは評価する可能性が無く、飼い主に親和的であり、ポジティブな感情を喚起するためだと解釈されている(Allen et al., 1991)。

このようなペットの影響は、人とペットの間に深い関係性がない場合にもみられる。Aydin et al.(2012)は、大学生を対象に実験を行い、サイバーボールによる排除操作の後に、イヌ(参加者の飼いイヌではない)を実験室に同席させる条件とさせない条件を設け、精神的健康を質問紙により測定した。参加者とイヌとの間に物理的接触があったことは報告されていない。実験の結果、排除操作による精神的健康の低下はイヌの同席により緩和され、イヌの同席の緩和効果は社会的受容の感覚を高めることにより媒介されていた。この結果は、人がイヌを自己を受容する存在だと認識している可能性(Aydin et al., 2012)を示唆している。

本研究

被排除後に高FNE者の示す回避的な反応は、所属欲求仮説と社会的再結合仮説の予測に反するものである。しかし、対人不安のソシオメーター理論では、対人不安が生じる背景には、所属欲求があると考えられている。実際に、被排除後に他者から受容される可能性が高い(否定的に評価される可能性が低い)と認識される場合には、高 FNE 者は対人関係を再構築する行動を選択する傾向を示し(Tsumura & Murata, 2015)、所属欲求を再充足しようとした。

しかし、Tanaka & Ikegami(2015)では、意識的制御を受けにくい対人認知の初期段階(選択的注意)においては、高 FNE 者は被排除後に自己防衛動機を優先していることが示されていることから、意識的な制御の影響を受けやすい対人認知の後期段階において、他者から受容される可能性についての推測により、再結合動機と自己防衛動機のいずれが優勢になるかが調整され、対人行動が変容している可能性が考えられる。先述した機能的投影は、他者に対する意識的な認識であることから、対人認知の後期段階に位置づけられる。

そこで、本研究では、機能的投影に着目し、相手から否定的評価を受ける可能性が低いと認識されれば、高 FNE 者においても低 FNE 者の場合と同様に、所属欲求を再充足しようとする動機の影響がみられるかどうかを検討した。ペットは人間に比べ否定的評価を行う可能性が低いと考えられる(Allen et al., 1991)。本研究では、排除操作を行った後に、参加者に対して否定的評価を行う可能性のない対象であるペットと、否定的評価を行う可能性のある対象である他者に対して、温かさに関する特徴をどの程度帰属させるかを比較検討した。温かさの評定を行うことにしたのは、対人評価は温かさと有能性の二次元に大別することができ、温かさの次元に社交性が含まれるためである(Cuddy, Fiske, & Glick, 2008)。参加者には、温かさに加えて、有能性と非疑人的特徴の評定も求めた。

また、被排除後の対人認知過程の初期段階での反応を検討した Tanaka & Ikegami(2015)の結果との比較を行うために、彼らと同様に、排除操作にはサイバーボールを用い、FNE の測定には SFNE 尺度(笹川他、2004)を使用した。もし、FNE の高低に関わりなく、排除操作によりペットの温かさの評定が上昇した場合、高 FNE 者が所属欲求を再充足するように動機づけられた可能性の他に、FNE が高い参加者が十分に含まれなかった可能性が考えられる。そのため、本研究と Tanaka & Ikegami(2015)の間で、参加者の FNE の高さに差があるかどうかを確認することにした。なお、本研究では、印象評定を行う際に、参加者が対象との接触を予期するような教示は与えなかった。仮説は以下の通りである。

仮説:排除されることで、低 FNE 者は他者とペットの温かさを共に高く評価するが、高 FNE 者はペットの温かさのみを高く評価する。

方法

参加者

大学生 70 名(男性 34 名、女性 36 名;平均年齢 18.77 歳、SD = 0.81)が実験に参加した。統制条件(N = 34)または排除条件(N = 36)にランダムに割り当てられた。

手順

参加者の FNE のレベルを測定するため、SFNE 尺度(笹川他、2004)への回答を求めた。この尺度は 12 項目から成り、5 件法(1–5)で回答を求めた(α = .90)。また、イヌとネコが好きかどうかを尋ねる項目(各 1 項目)に対して、7 件法(1–7)で回答するように求めた。得点が高いほど、FNE のレベルとペットの愛好度が高いことを示している。

続いて、社会的排除の操作として、サイバーボール(Williams et al., 2000)を実施した。参加者は、ゲームの場面のスクリーンショットを含んだ、ゲームの説明のための動画を視聴した後、ゲームを行った。他の実験室にいる参加者 3 名とネットワークを介してゲームを行うと教示した。実際には、他のプレーヤーはコンピューターで制御されていた。統制条件の参加者には他のプレーヤーと同じ頻度でパスが回されたが、排除条件の参加者には、最初に 2 回パスが回された後はパスが回されなかった。トスの回数は 40 回であった。

社会的に排除されることで所属欲求の充足度が低下し、気分が悪化することが知られているため(e.g., Williams, 2009)、排除操作の操作チェックとして、所属欲求の充足度と気分を測定した。測定には、Williams(2009)の項目を邦訳し修正したものを使用した。それぞれ 3 項目を用い、7 件法(1–7)で回答を求めた(順に、α = .79; α = .91)。得点が高いほど、所属欲求の充足度が高く、気分がポジティブであることを示している。

続いて、ペットと人物の写真を呈示し、それらに対する印象評定を求めた。ペットの写真 4 枚(イヌとネコの写真各 2 枚)、人物の写真 4 枚(男性と女性の写真各 2 枚)を準備し[2]、このうち、参加者と同性の人物の写真 1 枚と、ペット(ネコかイヌ)の写真 1 枚を呈示した。ペットと他者の写真の呈示順序は参加者間でカ

ウンターバランスをとった。

温かさの評定には、Epley et al.(2008)が用いた社会的つながりに関する項目を使用した。項目は、情け深い(thoughtful)、思いやりのある(considerate)、同情に満ちた(sympathetic)であった(人物での信頼性は $\alpha = .77$、ペットでは $\alpha = .83$)。有能性の評定には、Niemyjska & Drat-Ruszczak (2013)が用いた項目を使用した。項目は、自信のある(self-confident)、意志の強い(strong-minded)、創造力のある(creative)であった(信頼性は、人物では $\alpha = .63$、ペットでは $\alpha = .78$)[3]。非疑人的特徴の評定には、Eplay et al.(2008)が用いた項目を使用した。項目は、元気な(active)、活発な(energetic)、無気力な(lethargic)であった(信頼性は、人物では $\alpha = .83$、ペットでは $\alpha = .72$)。以上の項目に対して、7件法(1–7)で回答を求めた。得点が高いほど、評価対象にこれらの特徴が帰属されていることを示している。なお、サイバーボールと操作チェック、印象評定課題の実施には、Inquisit(Version 4.0.5.0; Millisecond Software)を使用した。

実験課題終了後、排除操作に疑問を抱いていなかったか、写真の人物と知り合いではなかったかを確認し、デブリーフィングを行った。

結果

FNE の得点が極端に高い参加者(4.75 点以上)が 1 名含まれていたため、倫理的な観点からこの参加者は統制条件に割り当て、分析から除外した。さらに、排除操作に疑念を抱いた者 4 名と留学生 1 名を分析から除外した。写真の人物と面識があった参加者はいなかった。分析対象は 64 名(統制条件 32 名、排除条件 32 名)であった。

FNE の得点において、統制条件($M = 3.36$, $SD = 0.75$)と排除条件($M = 3.34$, $SD = 0.71$)の間で有意差はみられなかった(t (62) = 0.10, *n.s.*, Hedge's $g = 0.02$)。イヌとネコのうち、評価対象となったペットの愛好度を分析に使用した。ペット愛好度において、統制条件($M = 5.34$, $SD = 1.29$)と排除条件($M = 5.00$, $SD = 1.55$)の間で有意差はみられなかった(t (62) = 0.97, *n.s.*, $g = 0.24$)。これより、FNE とペットの愛好度は実験条件間で等質であることが確認された。FNE とペット愛好度の間には有意な相関はみられなかった($r = .14$, *n.s.*)。

Tanaka & Ikegami(2015)の参加者($M = 3.32$, $SD = 0.81$; $N = 48$)と、本研究の参加者の($M = 3.35$, $SD = 0.72$; $N = 64$)の間で、FNE 得点の分散の大きさに有意差は無く(F(47, 63) = 0.61, *n.s.*)、平均点の差も有意でなかった(t(110) = 0.18, *n.s.*, $g = 0.03$)。

操作チェック

所属欲求の充足度と気分の得点について、排除操作、FNE(中心化)、排除×FNE の交互作用を説明変数とする重回帰分析をそれぞれ行った(Table 1, 2)。いずれにおいても、排除操作の主効果が有意であり、排除操作により、所属欲求の充足度が低下し、気分が悪化することが示された。排除×FNE は有意でなかった。排除操作は、FNE の高低にかかわりなく有効であったといえる。

Table 1 所属欲求の充足度の得点についての重回帰分析

	B		*SE*	β
切片	2.58	**	0.11	
排除	−1.51	**	0.22	−0.66
FNE	0.04		0.15	0.02
排除×FNE	−0.31		0.31	−0.10
R^2	0.45	**		

注) $^{**}p < .01$.

Table 2 気分の得点についての重回帰分析

	B		*SE*	β
切片	3.39	**	0.10	
排除	−1.17	**	0.19	−0.61
FNE	−0.20		0.14	−0.15
排除×FNE	−0.17		0.27	−0.07
R^2	0.39	**		

注) $^{**}p < .01$.

仮説の検討

人物とペットの温かさ、有能性、非擬人的特徴の評定値は、それぞれ各参加者にネストされているため、マルチレベル構造方程式モデリングによる分析を行った。分析には Mplus(Version 7.4; Muthén & Muthén)を使用した。仮説モデルを Figure 1 に示した。参加者間レベル説明変数は、排除操作(統制 = −0.5, 排除 = 0.5)、FNE(中心化)、排除×FNE、ペット愛好度(中心化)、気分(中心化)であった。参加者内レベル説明変数は、評価対象の種類(ペット= −0.5, 人物= 0.5)、評価対象の種類と参加者間レベル説明変数との交互作用項であった。気分の得点を説明変数に含めたのは、排除操作の影響が単にネガティブな出来事を経験し、気分が悪化したためではないことを示すためである。気分を介した説明変数の間接効果と全体効果の信頼区間は、R(Version

3.3.1; R Core Team)と Package MASS(Version 7.3-45; Ripley et al., 2015)を使用し、Monte Carlo 法により算出した(Preacher & Selig, 2012)。シミュレーション回数は 10,000,000 回であった。

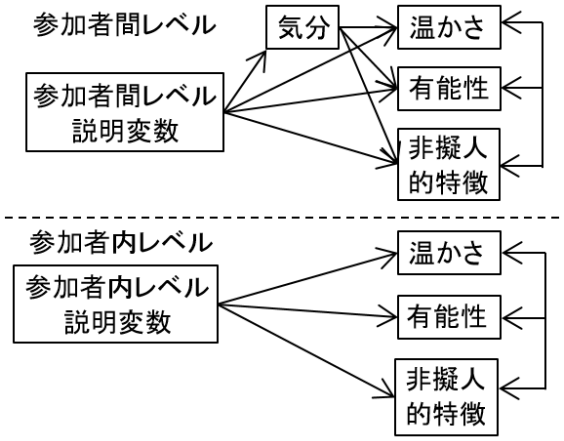

Figure 1 マルチレベル構造方程式モデリングの仮説モデル

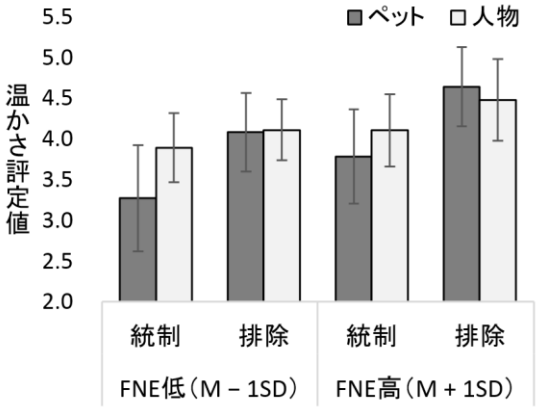

Figure 2 FNE の相対的に低い値点(平均値より 1*SD* 低い値点)と高い値点(平均値より 1*SD* 高い値点)での、統制条件と排除条件における、ペットと人物の温かさの推定値。エラーバーは 95%信頼区間を表す。気分の影響を統制した場合の推定値を示している。

適合させたモデルは飽和モデルであるため、適合度指標の報告は省略する。各パラメタの推定値を Table 3 に示した。また、FNE は連続変量として扱っていることから、FNE の相対的に低い値点(平均値より 1*SD* 低い値点)と高い値点(平均値より 1*SD* 高い値点)での、統制条件と排除条件における、ペットと人物の温かさの推定値を Figure 2 に示した。なお、これらの推定値は気分の影響を統制して求めたものである。温かさに対する排除操作の直接効果が有意であり、排除操作の直接効果により温かさの評価が上昇した。一方で、排除操作の気分を介した間接効果も有意であり(B = −0.38, 95% CI [−0.77, −0.01])、排除操作に伴う気分の悪化により、温かさの評価が低下した。直接効果は間接効果によって抑制され、排除操作の全体効果は有意ではなかった(B = 0.18, 95% CI [−0.21, 0.56])。

温かさにおける排除操作の全体効果に対する、評価対象の種類の調整効果が有意であり(B = −0.62, 95% CI [−1.24, 0.00])、人物においては排除操作の効果は有意でなかったが(B = −0.13, 95% CI [−0.57, 0.32])、ペットにおいては排除操作の効果が有意傾向であり、排除操作によりペットの温かさが高く評価される傾向がみられた(B = 0.49, 90% CI [0.04, 0.94])。しかし、排除操作の直接効果と間接効果に対する、評価対象の種類の調整効果はいずれも有意ではなかった(B = −0.08, 95% CI [−0.57, 0.38])。また、排除操作の直接効果、間接効果、全体効果に対する、種類×FNE の調整効果はいずれも有意ではなかった(順に、B = −0.01, 95% CI [−0.15, 0.11]; B = 0.07, 95% CI [−0.78, 0.92])。

また、有能性に対する、排除×FNE の交互作用の直接効果が有意であり、排除操作は、FNE が低い場合(M − 1*SD*)ではなく高い(M + 1*SD*)場合に、対象の有能性の評価を低下させていた(順に、B = 0.29, SE = 0.29, *n.s.*; B = −0.67, SE = 0.30, p < .05)。この他の排除操作の効果とその他の変数との交互作用は、いずれも有意ではなかった。

考察

本研究では、社会的に排除された後、他者から否定的評価を受ける可能性が低いと認識されれば、高 FNE 者においても、所属欲求を再充足しようとする動機が活性化するかどうかを検討した。社会的に排除されることで、低 FNE 者は他者とペットの温かさを共に高く評価するのに対して、高 FNE 者はペットの温かさのみを高く評価すると予測した。

気分の影響を統制した場合、排除操作によって温かさの評価が上昇したが、この排除操作の効果は評価対象の種類と参加者の FNE の高さによって調整されなかった。仮説では、低 FNE 者は排除されることで、他者とペットの温かさを共に高く評価すると予測しており、低 FNE 者の反応は仮説に沿ったものである。しかし、高 FNE 者も被排除後に評価対象の種類に関わりなく温かさを高く評価しており、仮説は支持されなかった。Maner et al.(2007)の Study 4 では、被排除後に高 FNE 者は実験パートナーの社交性を高く評価しなかったと報告されており、本研究の

Table 3 マルチレベル構造方程式モデリングによる分析結果

参加者内レベル	*B*		*SE*
温かさに対して			
種類	0.20		0.16
種類×排除	−0.54		0.39
種類×FNE	−0.17		0.21
種類×排除×FNE	0.08		0.43
種類×ペット愛好	−0.05		0.10
種類×気分	0.07		0.20
有能性に対して			
種類	−0.09		0.15
種類×排除	0.44		0.35
種類×FNE	−0.11		0.21
種類×排除×FNE	−0.38		0.40
種類×ペット愛好	−0.26	*	0.12
種類×気分	0.42	*	0.19
非擬人に対して			
種類	−0.39	†	0.21
種類×排除	0.31		0.42
種類×FNE	−0.66	**	0.24
種類×排除×FNE	0.00		0.47
種類×ペット愛好	0.05		0.14
種類×気分	0.08		0.29
共分散			
温かさ⇔有能性	−0.17	*	0.08
温かさ⇔非擬人	0.17		0.12
有能性⇔非擬人	0.39	**	0.11
残差分散			
温かさ	0.79	**	0.14
有能性	0.68	**	0.09
活動性	1.20	**	0.18

参加者間レベル	*B*		*SE*
気分に対して			
排除	−1.19	**	0.19
FNE	−0.18		0.12
ペット愛好	−0.07		0.07
排除×FNE	−0.13		0.25
温かさに対して			
排除	0.56	**	0.21
FNE	0.29	*	0.14
ペット愛好	0.03		0.06
気分	0.32	*	0.16
排除×FNE	0.07		0.27
有能性に対して			
排除	−0.19		0.23
FNE	−0.23	†	0.13
ペット愛好	0.12	†	0.07
気分	−0.11		0.14
排除×FNE	−0.67	*	0.27
非擬人に対して			
排除	0.08		0.24
FNE	−0.31	*	0.13
ペット愛好	0.15	*	0.07
気分	0.01		0.15
排除×FNE	−0.11		0.25
共分散			
温かさ⇔有能性	−0.13		0.10
温かさ⇔非擬人	−0.02		0.10
有能性⇔非擬人	0.02		0.11
切片			
気分	0.00		0.09
温かさ	4.05	**	0.09
有能性	4.72	**	0.10
活動性	4.20	**	0.09
残差分散			
気分	0.55	**	0.09
温かさ	0.13		0.12
有能性	0.33	**	0.12
活動性	0.03		0.15

注）** $p < .01$, * $p < .05$, † $.05 < p < .10$. “非擬人”は非擬人的特徴を表す。表中の値は非標準化係数。

結果はこれと整合しない。ただ、彼らの研究では、評価対象との接触が予期されていたが、本研究では接触は予期されていなかったため、高 FNE 者が評価懸念を感じなかった可能性が考えられる。

対人認知の初期段階の反応との比較

本研究の結果は、比較的意識的な制御が働きにくいと考えられる、対人認知の初期段階(選択的注意)における排除の影響を検討した Tanaka & Ikegami(2015)の結果とも一見したところ異なっている。Tanaka & Ikegami(2015)では、低 FNE 者は排除操作の後に喜び表情に配分する注意を増加させたのに対して、高 FNE 者は、喜び表情に配分する注意を増加させず、喜び表情よりも怒り表情に対してより多くの注意を配分した。これは、排除されると、低 FNE 者は再結合動機が喚起され、高 FNE 者は自己防衛動機が喚起されていたことを示す。しかし、本研究では、高 FNE 者は低 FNE 者と同様、排除された後、他者とペットに対して温かさに関する特徴を多く帰属し、再結合動機が喚起されていことを示唆している。Tanaka & Ikegami(2015)の参加者と、本研究の参加者の間で、FNE 得点に差はみられなかったことから、両者の違いはサンプルの FNE の水準の違いによるものではないといえる。選択的注意のような、意識的な制御の影響を受けにくいと考えられる対人認知の初期段階とは異なり、意識的な制御が機能すると考えられる後期段階では、排除された後に他者から否定的に評価される可能性が低いと判断されることで、再結合動機が優勢となり、認知過程に影響を与えたものと考えられる。

また、行動レベルでは、既述したように Tsumura & Murata(2015)が、高 FNE 者は被排除後に、他者から受容される可能性が高いと認識される場合に低いと認識される場合に比べ、対人関係の再構築を選択する傾向が強まることを示している。彼らと本研究の結果は、高 FNE 者に対しても所属欲求仮説が妥当性をもつものであり、所属欲求が普遍的な欲求であることを示しているといえる。また、先行研究では、高 FNE 者は他者からの否定的評価が予測される状況では、被排除後に回避的な反応を示したが(Mallott et al., 2009; Maner et al., 2007)、本研究では、否定的評価が予測されない場合は、高 FNE 者も所属欲求を再充足しようとする反応を示し、対人不安とそれに伴う回避的行動が生じる背景に所属欲求があるとする Leary(2001)の理論が妥当であることが示唆された。また、本研究では、行動段階の反応を測定した Tsumura & Murata(2015)とは異なり、対人認知の後期段階における認知反応を測定しており、被排除後における回避的な動機に対する意識的な制御が、この段階で行われていることが示唆された。

先行研究では、思春期の子どもにおいて、社会的排除を含む関係性を利用したいじめは、被害者の対人不安と回避傾向を高めることが報告されている(Hoglund & Leadbeater, 2007; Siegel, La Greca, & Harrison, 2009)。対人不安のソシオメーター理論と本研究の結果にもとづくと、他者からの否定的評価の予期を低減させることで、いじめ被害者の回避的行動を抑制することができると考えられる。

気分の影響

Maner et al.(2007)では、排除操作による気分の悪化と、気分と印象評定の関連はみられなかった。しかし、本研究では排除操作により気分は悪化し、気分を介した排除の間接効果は温かさの評定を抑制し、温かさの評定に対する排除操作の全体効果はみられなかった。このような結果の相違は、使用した排除操作方法が異なることに起因するものかもしれない。機能的投影には目標に一致した行動の遂行を促進する効果があるとすると(Maner et al., 2005)、気分の悪化を改善することで、排除後の対人関係の再構築が促進される可能性が考えられる。

また、気分の影響を統制しない場合、人物においてではなく、ペットにおいて、排除操作による温かさの評定値の上昇がみられたものの、気分の影響を統制すると評価対象の種類の調整効果は有意ではなくなった。被排除後にペットの温かさのみが高く評価されたのは、人物よりもペットの方が否定的に評価を行う可能性が低いと認識されていたためではなく、ペットの評価の方が気分の悪化の影響を受けにくいためであったと考えられる。

本研究の限界と今後の課題

本研究では、ペットが他者に比べて否定的評価に対する懸念を喚起しにくい存在だと仮定し実験を実施したが、実験参加者が実際にそのように認識していたかどうかは確認していない。実験の結果、排除の効果に対する評価対象の調整効果は、気分の影響を統制することで消失した。本研究では、他者との接触が予期されていなかったため、他者の場合もペットの場合と同様に否定的に評価されることが予期されにくく、両者の違いが生じなかったと考えられる。今後、参加者が否定的評価を受ける可能性の高さが異なると認識していることを確認すること、また、評価対象との接触を予期させるパラダイムを用いることが望まれる。

また、本研究では、FNE が高い場合に排除操作により対象の有能性が低く評定されることが示されたが、有能性の評価に対する排除操作の影響がなぜ生じ

たのかは、筆者が知る限り既存の理論では説明することができない。さらなる検討が必要である。

引用文献

AC ワークス（2014）. 写真 AC Retrieved from http://photo-ac.com（2014 年 3 月 30 日）

Allen, K. M., Blascovich, J., Tomaka, J., & Kelsey, R. M. (1991). Presence of human friends and pet dogs as moderators of autonomic responses to stress in women. *Journal of Personality and Social Psychology*, *61*, 582-589.

Aydin, N., Krueger, J. I., Fischer, J., Hahn, D., Kastenmüller, A., Frey, D., & Fischer, P. (2012). "Man's best friend:" How the presence of a dog reduces mental distress after social exclusion. *Journal of Experimental Social Psychology*, *48*, 446-449.

Baumeister, R. F., & Leary, M. R., (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, *117*, 497-529.

Cuddy, A. J. C., Fiske, S. T., & Glick, P. (2008). Warmth and competence as universal dimensions of social perception: The stereotype content model and the bias map. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology*. Vol. 40 (pp. 61-149). San Diego, CA: Academic Press.

DeWall, C. N., Maner, J. K., & Rouby, D. A. (2009). Social exclusion and early-stage interpersonal perception: Selective attention to signs of acceptance. *Journal of Personality and Social Psychology*, *96*, 729-741.

Epley, N., Akalis, S., Waytz, A., & Cacioppo, J. T. (2008). Creating social connection through inferential reproduction: Loneliness and perceived agency in gadgets, gods, and greyhounds. *Psychological Science*, *19*, 114-120.

Epley, N., Waytz, A., & Cacioppo, J. T. (2007). On seeing human: A three-factor theory of anthropomorphism. *Psychological Review*, *114*, 864-886.

Hoglund, W. L., & Leadbeater, B. J. (2007). Managing threat: Do social-cognitive processes mediate the link between peer victimization and adjustment problems in early adolescence? *Journal of Research on Adolescence*, *17*, 525-540.

Leary, M. R. (2001). Social anxiety as an early warning system: A refinement and extension of the self-presentation theory of social anxiety. In S. G. Hofmann & P. M. DiBartolo (Eds.), *From social anxiety to social phobia: Multiple perspectives* (pp. 321-334). Needham Heights, MA: Allyn & Bacon.

Leary, M. R., & Kowalski, R. M. (1995). *Social anxiety*. New York, NY: Guilford Press.

Levinson, B. M. (1962). The dog as a "co-therapist". *Mental Hygiene*, *46*, 59-65.

Mallott, M. A., Maner, J. K., DeWall, N., & Schmidt, N. B. (2009). Compensatory deficits following rejection: The role of social anxiety in disrupting affiliative behavior. *Depression and Anxiety*, *26*, 438-446.

Maner, J. K., DeWall, C. N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection? Resolving the "porcupine problem". *Journal of Personality and Social Psychology*, *92*, 42-55.

Maner, J. K., Kenrick, D., T., Becker, D. V., Robertson, T. E., Hofer, B., Neuberg, S. L., …Schaller, M. (2005). Functional projection: How fundamental social motives can bias interpersonal perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, *88*, 63-78.

Molden, D. C., & Maner, J. K. (2013). How and when exclusion motivates social reconnection. In C. N. DeWall (Ed.), *The Oxford handbook of social exclusion* (pp. 121-131). New York, NY: Oxford University Press.

Moskowitz, G. B. (2002). Preconscious effects of temporary goals on attention. *Journal of Experimental Social Psychology*, *38*, 397-404.

Niemyjska, A., & Drat-Ruszczak, K. (2013). When there is nobody, angels begin to fly: Supernatural imagery elicited by a loss of social connection. *Social Cognition*, *31*, 57-71.

Preacher, K. J., & Selig, J. P. (2012). Advantages of Monte Carlo confidence intervals for indirect effects. *Communication Methods and Measures*, *6*, 77-98.

Rapee, R. M., & Heimberg, R. G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, *35*, 741-756.

Ripley, B., Venables, B., Bates, D. M., Hornik, K., Gebhardt, A., & Firth, D. (2015). Package MASS (Version 7.3-45). Retrieved from https://cran.r-project.org/web/packages/MASS/ (June 23, 2016.)

笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二（2004）. 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度（FNE）短縮版作成の試み―項目反応理論による検討― 行動療法研究, *30*, 87-98.

Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, *92*, 641-669.

Siegel, R. S., La Greca, A. M., & Harrison, H. M. (2009). Peer victimization and social anxiety in adolescents: Prospective and reciprocal relationships. *Journal of Youth and Adolescence*, *38*, 1096-1109.

Tanaka, H., & Ikegami, T. (2015). Fear of negative evaluation moderates effects of social exclusion on selective attention to social signs. *Cognition and Emotion*, *29*, 1306-1313.

Tsumura, K., & Murata, K. (2015). Effects of social anxiety and group membership of potential affiliates on social reconnection after ostracism. *Current Research in Social Psychology*, *23*, 18-25.

Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of

social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, *33*, 448-457.
Williams, K. D. (2009). Ostracism: A temporal need-threat model. In M. P. Zanna (Ed.), *Advances in experimental social psychology.* Vol. 41 (pp. 275-314). San Diego, CA: Academic Press.
Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, *79*, 748-762.
Zasloff, R. L., & Kidd, A. H. (1994). Loneliness and pet ownership among single women. *Psychological Reports*, *75*, 747-752.

註

1) 本研究の一部は、2016 年に開催された関西心理学会第 128 回大会において発表されている。

2) 実験協力者に中立表情の撮影を依頼した。ペットの写真は AC ワークス(2014)のウェブサイトよりダウンロードしたものを使用した。写真はいずれもカラー写真であった。写真に特定の表情が表れていないことを確認するため、予備調査を行った。人物の写真 6 枚(男性 3 枚、女性 3 枚)を大学生 13 名(男性 6 名、女性 7 名、平均年齢 21.77 歳、*SD*= 3.19)に呈示し、幸福、悲しみ、驚き、恐怖、怒り、嫌悪の表情が表れているかを 7 件法で評定を求めた(1:全く表れていない―4:どちらともいえない―7:強く表れている)。半数の参加者は男性の写真から、残り半数の参加者は女性の写真から回答を始めた。また、イヌの写真 3 枚を大学生 13 名(男性 5 名、女性 8 名、平均年齢 20.69 歳、*SD* = 0.48)が、ネコの写真 4 枚を大学生 14 名(男性 3 名、女性 11 名、平均年齢 19.71 歳、*SD* = 0.91)が評定した。ペットの写真の評定方法は、人物の写真と同様であった。各表情の評定値の平均のなかに、中点(4 点)よりも有意に高いものが含まれている写真は使用しなかった。

3) 有能性では、「創造力のある」が信頼性を低下させていたため、この項目を除いて尺度を構成し、除外した場合の α 係数を報告した。

Social exclusion and perceived warmth of others and pets: Comparison between those with high versus low fear of negative evaluation

Hiroaki TANAKA (*Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University*)
Tomoko IKEGAMI (*Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University*)

It is well recognized that people are likely motivated to reconstruct social connections after being socially excluded. However, some previous studies indicate that this is not the case for individuals with high levels of fear of negative evaluation (FNE), who consider an encounter with a new person as further social threat. We therefore reasoned that those with high FNE may also attempt to restore their sense of belonging when they perceive the probability of receiving negative evaluation as low. In the present experiment, 70 university students received exclusion manipulation and were presented with photos of a person and a pet. They were asked to rate them on the dimension of warmth. Findings revealed that exclusion enhanced the perceived warmth of both the person and pet among either of those with low and high FNE. The result indicates that even those with high FNE try to restore their sense of belonging through an indirect strategy of attributing prosocial traits to others and pets if they do not expect interactions with, and negative evaluation from, the targets.

Key words: social exclusion, social anxiety, functional projection, anthropomorphism.